

第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



高校生の部 優秀賞 受賞作品

『永遠の杜』

東京都

白百合学園高等学校

一年 山口 眞佳

永遠の杜

白百合学園高等学校 一年
山口 眞佳(やまぐち まなか)

私の住む代々木には明治神宮があります。この夏休み、毎朝ではありませんが、少し自然を感じたいと思ったとき、参宮橋門から入り、内苑を散歩しています。とても大きな木々が聳え立つ緑の杜という雰囲気ですが、すべて人工的に植えられた木々です。日頃、神宮の杜に生息する鳥たちのさえずりで目を覚ますほど、その豊かな自然に触れています。グリーンアースで渋谷区の地図情報を見ると、その面積の一割程度、明治神宮、国立オリンピック記念青少年総合センター、代々木公園が集まるこの一角に緑が広がっていることが良く分かります。この杜を何気なく散歩していると気づかないのですが、その木々をじっと見ていると、その種類にとっても興味が湧いてきます。

私の家では天照大御神を祀っています。そのお札である「天照皇大神宮」は、伊勢神宮にお参りした際に頂いたものです。厳かな気持ちで伊勢神宮を訪れ、志摩半島の自然の空気を思いっきり吸い込むことを、数年に一度は行うようにしています。いつも、伊勢神宮の内宮、外宮では、杉の巨木に魅了されます。伝説では二千年前に五十鈴川のほとりに内宮が建てられたのが起源とされています。これらの杉の木の樹齢が、数百年、あるいは、それ以上と聞いても、なるほどと思えるほど、立派です。では、明治神宮の木々はどうでしょう。かなり様子が違います。

いま明治神宮がある場所はかつて、ほとんど耕地で荒れ地のような景観であり、木々が少なかったのです。その地に全国から樹木が奉獻され、造営されたのが明治神宮内苑の杜です。すでに当時の東京では大気汚染などの公害が問題となり、杉の木が十分に生育できないと考えられていました。内閣総理大臣であった大隈重信は、伊勢神宮、日光東照宮のような荘厳な杉林を望んでいましたが、当時の林学者らが、杉ではなく、照葉樹の杜をグランドデザインしています。それも百年の歳月をかけて「永遠の杜」を造営しよう。

椎、樅、楠などの照葉樹の杜を形成するために、百年計画で植樹が行われています。最初に、赤松、黒松を植え、杜が形作られています。その後、下の層に成長の早い杉、檜などの針葉樹、そして、将来の主木となる椎、樅、楠などの照葉樹が植えられています。五十年後には赤松、黒松などが針葉樹に押されて枯れ、百年後には、照葉樹が中心を占めるように計画されています。

明治神宮が鎮座したのが一九二〇年ですから、すでに百年が経過しています。自然に任せ、植物の世代交代を促し、いまでは照葉樹の巨木を多く見ることが出来ます。ですが、きつと赤松、黒松、杉などの植物も生き残っているに違いないと思い、このような観点で内苑の杜を散歩することにしました。

明治神宮宝物殿の前には、見事な芝生が広がっています。この芝生の中に、ひとときわ立派な赤松が大きな枝ぶりを伸ばしています。まだ幼稚園に通っている頃、家族でこの芝生を訪れピクニックしたものです。いつも、どこにシートを広げるか良い場所を探していましたが、決まってこの赤松の枝の先で日陰になっている場所を選んでいました。その下に寝そべり、赤松の細いとげとげの葉の間から太陽を覗いていたことを鮮明に覚えています。このとき、赤松が杜の主役であったことを知る由もありませんが、いま、改めて見ると、生き残るには十分な生命力があることを感じます。宝物殿入口付近には、黒松が悠々と枝を広げているこ

とも気づきました。北参道の入口、入ってすぐの鳥居の傍に、真つすぐな杉の木を見つけることができます。しつかりとした幹ですが、やや、照葉樹に押されているようにも感じられます。

確かに、伊勢神宮、日光東照宮の杉の木々には神が宿る荘厳さがあります。明治神宮の照葉樹、樹齢百年といったところで、伊勢神宮の樹齢数百年以上に比べれば、まだまだ若いということになるかと思えます。ですが、杜全体では、神が宿る荘厳さが備わりつつあるように感じられます。

私の住むまち代々木の地名の由来は「明治神宮のある場所に代々縦の太木があったこと」だそうです。これが数百年後、内苑の杜の木々が代々あったことに変わっているかも知れません。代々木の近くには渋谷、原宿、表参道、日本文化を世界に発信する最先端の街があり、この杜はここで活躍する人々に癒しを与え、新たな発想を生み出す原動力となっているかけがえのない自然です。これからも大切にしたいと思えます。